

2012.2.21 朝日新聞 34

紋別空港 CO₂ 相殺

排出分＝森林保全 空港で全国初

紋別市のオホーツク紋別空港が今月から、空港内で排出した二酸化炭素(CO₂)を市内の森林保全事業で相殺する「カーボンオフセット」の取り組みを始めた。空港での取り組みは全国初で、市と一緒に観光資源の流水減少の要因とされる温暖化対策の取り組みとしてもPRしている。

「流水を守る」PR

空港ターミナルを管理運営する市の第三セクター、オホーツク紋別空港ビルが環境省のモデル事業に応募して選ばれ、CO₂排出量や吸収量の算出費用などをもらえることになった。期間は8月末までで、この間、空港ビルで排出すると見込まれるCO₂約

100ト分を、市有林のCO₂吸収量の中で相殺する。

市は市有林約2千杉のうち約190杉を間伐してCO₂吸収量を高め、年間1千トを新たに吸収できるようにした。空港のCO₂排出分の相殺には「流水の森クレジット」と名付けたこ

の吸収枠を使う。

今後はカーボンオフセットに取り組みとうとする全国の事業所などへこの吸収枠の活用を働きかけていく方針で、市はCO₂吸収によって得た収益(1トあたり約1万円)を市有林の整備に充てていく考えだ。

このため、市は3月10日まで空港利用者にカーボンオフセット空港キャンペーンを展開。空港利用証明書



全国初の「カーボンオフセット空港」のPRチラシを受け取る旅行者＝紋別市の紋別空港

や市有林のカラマツ材で作ったコースターなどを配り、「流水を守る環境にやさしい空港」をPRしていく。

モデル事業期間が終わる9月以降について、空港ビルの担当者は「環境保全への取り組みが広く理解され、空港の利用が促進されれば、継続を検討することになるかもしれない」としている。

(奈良山雅俊)